No.123
公民館だより
平成17年３月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

介護について

由良地区公民館館長　飯澤登志朗

平成16年を漢字で表すと、「災」でした。

国の内外を問わず自然災害や地震が発生し多くの人命、財産が失われました。改めて、亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

過日、神戸市の「人と防災未来センター」を訪れる機会がありましたが10年前の阪神淡路大震災は、言葉では伝えきれないとして映像や実物資料、詳細データで後世に伝え、また防災のあり方をお互いに考えるものです。

また、復興住宅でも多くの入居者があります。

中越地震でも多くの被災された方々が雪のなか今なお自宅に帰れず不自由な生活を余儀無くされています。

いずれも高齢者であり、その割合は四割を越えると云われています。

平成16年の出生数は、全国で約一一〇万人ですが一人しか生まれなかった自治体が九ヶ村あったとのことです。

昭和22年から昭和24年の出生数は毎年二六〇万人台と爆発的に増え所謂団塊世代を形成してきました。その世代もまもなく還暦を迎え高齢者の仲間入りするとその高齢化率は益々高く拍車が掛かります。

その高齢者社会での問題は、介護ではないでしょうか。

私たちは簡単に介護を口にしますがその内容は千差万別で安定した保障は確約されたものではありません。

従来、介護は嫁の仕事とされ退職して介護というケースが多く見られました。

現在は、社会全体で支え合おうと介護保険制度が実施されています。

先に述べた復興住宅で孤独死が何日も分からなかったり、話相手が無く寂しいと語る独居老人等、介護には悠長な時間はないと思います。

前高槻市長の江村利雄氏が、「市長の代わりはおっても夫の代わりはおりません」と市長職を辞任し奥さんの介護をされています。

その著書のなかで、介護の様子が克明に記されていますが、市長職と家庭内の狭間でのご苦労は大変なものがあったと伺い知ることが出来ます。

子ほしくない、四人に一人。こんなアンケート結果が出ました。

「子どもにかかる経費や時間を自分の楽しみに回したい」、「出産や育児がわずらわしい」で、少子化の背景に、出産子育て世代の意識変化があるとのことですが本当にこれで良いのでしょうか。

こんな端的なものではなく実際にはその過程には色々複雑な要素が含まれていると思いますが納得出来ない部分があります。

最後に、この度由良地区でも民生児童委員の任期満了で交替がありました。地域の福祉に活動された前任の方々に敬意を表し、新しい任を担う方々のご活躍を心からお願いいたします。

行事報告

主事　枝川隆亮

◎十一月二十日(土)　子どものびのび体験活動

「子ども料理教室」の実施

由良子供会連絡協議会との共催で「子ども料理教室」を由良の里センターで実施しました。

公民館サークル活動「食改ちどり」料理教室の大森婦美子さんを代表とする四名の先生に指導をお願いし、低学年にもこなせる料理をお願いしました。

五年生をリーダーとし三班編成で料理を分担し始めました。

慣れない手つきで水を腕にかけながら野菜を洗う子、あぶない手つきで包丁を使う子どもなど講師の先生も気が抜けなかった様子でした。

好き嫌いの多い子どもの多いなか今年の献立は大変好評で食べ残す子どもが少なかったようです。

早く食べ終わった子どもたちの中にはじゃれながら駆け出す子もおり指導する難しさを今回も体験しました。

事前に手洗い等衛生面のチェックを学ばせたり、食事の前後のあいさつを実施できたこと、五年生をリーダーとしての班編成は子どもの自主性でできたこと、後始末も全員で分担し手際よくできた点など評価できた点はたくさんありました。

◎十一月二十三日(火)　文化祭

台風二十三号により宮津市内でも大きな災害が発生し、避難生活を余儀なくされている方がいる状況の中ではありましたが期日を変更し「元気を出そう文化祭」として実施しました。

なお当日は、被災市民を少しでも支えようと義援金募集を実施し一一、四一八円を市に提出しました。

年々出展数が多くなり、展示パネルを増設するも対応できず廊下にも展示しました。

出展数（出展者数）

染色二九点（二十人）
砂絵十二点（十二人）
工作五十点（四十八人）
書道十点（十人）
習字四五点（四五人）
写真三三点（十人）
絵画九二点（九二人）
生花二五点（二五人）
研究発表一四点（一四人）
ちぎり絵十四点（五人）
手芸等九点（四人）
油絵一点（一人）
合計三三四点（二八六人）

他に食改グループの参加（食品展示・説明）地蔵盆写真の展示がありました。

◎十二月五日(日)　市民卓球大会

市民体育館での大会に由良チームが参加し優秀な成績を残しました。

○団体戦（Ａ級）

四名一チームのうち一名欠席の為、由良出身の河原末彦さんに応援を求めオープン参加になりましたが、見事優勝するも参考記録になり残念！

○個人戦

男子Ｂ級三位　中西一義さん
女子Ａ級優勝　日比道栄さん

◎一月九日(日)　成人式

平成十七年に成人の日をお迎えになられた皆さん、誠におめでとうございます。

これからは大人の一員としての権利と義務・責任ある社会人

の一員として、おおらかにはばたいてください。

由良地区新成人のかたがた
（順不同・敬称略）

坂下容子　泉　さやか
今西絢美　間縞裕介
濱野　宏　中西珠美
田中信次　川崎絵美
竹田広郎　有本一裕

◎一月三十日(日)　四部対抗囲碁大会

囲碁愛好家の高齢化と減少していく中、十三名の参加で大会を開催しました。

団体戦では、昨年同様一部が優勝、個人戦では一部の飯澤さんが優勝されました。

以下、結果を報告します。（敬称を略します。）

団体戦		個人戦
優勝	一部	飯澤登志朗
準優勝	二部	西之上熊吉
三位	三部	山本正博
四位	四部	

今　教育に思うこと

由良小学校長　倉野英明

学校の後ろに悠然とそびえ立つ由良ヶ岳も中腹までうっすらと雪をかぶり、吹き下ろす風の冷たさに身震いをする厳寒の中、休み時間ともなると勢いよく児童たちがグランドや校舎周辺に駆け出して行きます。ボールを蹴ってサッカーする子。一輪車に乗って得意気に走り回る子。遊具の周りで友達と遊ぶ子。クラスで鬼ごっこに興じる子等々「浜っ子」由良の元気な姿があちこちに見受けられます。今まで難しい課題や問題にがんばって取り組み、ほっと気持ちを和らげ、気分を転換し次の学習に立ち向かう。何事も真面目に取り組む、由良の子の伝統が今も息づいています。

平成十四年度から実施している学習指導要領では、「ゆとりの中で生きる力の育成」を図ることが基本目標になっています。

「ゆとり」とは、学校完全週五日制になり、休日を活用しての幅広い体験活動や授業時間の縮減と授業内容の厳選により、詰め込みではなく、余裕を持って学習に取り組むことができる。

「生きる力」とは、（一）自分で課題を見つけ、考え、行動しよりよく問題を解決する力（二）自らを律しつつ、他人と協調し、相手を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性（三）たくましく生きるための健康と体力等です。そのため、各校で特色ある教育を行うことができる「総合的な学習の時間」が三年生以上の学年に創設されました。この総合的な学習の時間は、年間一〇五～一一〇時間、週にすると三時間ぐらい学習することになります。地域の特性を生かした（自然、環境、施設、歴史的なもの、人材等）や今日的な学習課題（英語活動、福祉、環境問題、国際理解、健康等）を中心に、それぞれの学校が特色を生かした指導計画を作成し、取組を進めています。

本校も、学年毎にテーマを設定し行うものと全学年で取り組むものとを分けながら、児童たちが自ら課題を設けて、今までの教科の時間で培った知識や技能を総合的に生かしながら、体験的、問題解決的な学習を展開しています。

しかしながら、教科の時間や内容の削減については、学習指導要領の導入前から学力が落ちるのではないかと言った、学力低下論が叫ばれていましたが、三年経ち、この間、総合的な学習の時間の指導計画や内容の見直し等もあり、ようやく軌道に乗り成果が見え始めたここにき

て、昨年、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）が四十一か国の十五歳生徒を対象にした学習到達度調査の結果から、我が国の学力が前回と比べ低下傾向にあり、全体として世界のトップレベルとは言えない状況にあると言った報告がされました。そして、この一月、文部科学大臣が、総合的な学習の時間より算数や国語の基礎的な教科を重視するべきであるとか。授業時間が減って学力が向上するはずがない。土曜日も半日授業をしてもよいのではないかと言った、ゆとり教育の象徴である総合的な学習の時間の在り方について言及し、それを受けて文科省も見直す検討を始めたと新聞で報じられました。

教育現場をあずかる者にとってこのように教育施策が短い期間にころころ変わることに戸惑いをかくしきれません。学力についても、いくら憶えたかといった知識の量だけでとらえるのではなく、基礎的・基本的な内容を確実に身に付け、その上に主体的に学び、考えることのできる「生きる力」が育まれているかによって捉えることが大事であると思います。

二十一世紀は、変化の激しい先行き不透明の時代になるであろうと言われています。確かに、十年前にはこんなにもパソコン、携帯電話、デジタル製品、薄型テレビ等のコンピュータを組み込んだ製品が各家庭の生活に入っていたと言うことはなかったと思います。

今は、会社に入るにも、就職するにもパソコンが操作できる基礎知識ぐらいは習得していなくては、仕事をこなすことは難しいと言われています。児童たちが大人になる頃には、今以上に新たなものが仕事や生活の中に入っていることだと思います。

学校教育においても、今まで教わったり、習得してきた知識や技能だけでは、対応仕切れないと言うことに陥る可能性があります。その時に必要な資質として、前にも書いたように思考力、判断力、表現力の豊かな、少々なことではくじけない強い心と身体で、何事に対しても進んで学び、考えることができることが必須だと思います。そのような児童を育てるため、学校に課せられた役割と使命を自覚し、日々教育に当たっていきたいと思います。

宮津市人権啓発標語作品展入選

●人権標語の部

優秀賞

由良小　三年　濱本ももさん

うれしいな　やさしい一言　ありがとう

これからの松寿会

山口幸一

長い間地域の人達から親しまれて来た〝由良老友会〟の名称に代えて〝由良松寿会〟の名称が誕生してから一年が過ぎた。名称を代えた理由、そして今後どの様に行動するのかを考えてみたい。

名称を代えた理由は明快であった。そのものズバリで老人臭にみちた名称を嫌ったからである。老人が老人である事を嫌悪するという奇妙な雰囲気の中で、旧名に固執する少数意見を押しのけるかたちで新しい名称は決定した。老人が自らを否定し、嫌悪するのは自らの過去をふり返っての事か、高齢化社会と云われる社会の中で厄介な存在でしかない無力な老人である事を恥じての事か。

あまり高いと云えない次元の討論の中で、昨今の老人クラブの在り方に疑問を呈した、現状でいいのかという其の発言は一際の光彩を放った。これが其のまま今日の松寿会の行動指針となっている。

元来老人クラブの行動方針は、自身の健康管理、老人仲間同士親しむ友愛、社会に貢献するボランティア活動の三つを基本としているが、昨今の老人クラブの有り様は仲良しクラブ的な行動が主流を占めている感をまぬがれない。そして社会も止むを得ない事として容認している風潮がある。老人を社会の現実の埒外において邪魔にさえならなければそれでいいじゃないか、それよりおとなくしていてくれた方が、といった風潮につよく反発を感じる。世俗の理想的老人像なんてそんなものか。

ここで社会の現実に目を移そう。七二〇兆円国民一人に六〇〇万円という天文学的な数字の国債残高。二〇一五年には総人口の二五％つまり四人に一人が老人によって占められ二・四人の若い世代に支えられるという怖るべき高齢化社会の到来、消費税率八五％などと囁かれる昨今、八五％という数字は消費税率のみから見た数字ではあろうが、何れにしても国債償還期に当たる次世代には驚異的な数字の国民負担率が待ちうけている。こんな時代に誰が好きこのんで子供を産み、育てていくだろうか。だから子供は減りつづけてゆく。毎日の新聞を見るといい、吾が子に加えられる親の残酷な仕打ちを、親の性格もあろうが誰がそんな仕打ちをするものか。其の裏には現実の生活に苦しみ喘ぐ若い世代の苦悩がある筈である。其の苦しみを理解しようともしないで鬼畜の振る舞いだというのは残酷であろう。

主権在民と云い乍ら徳川時代さながらに、お上さまに逆らう者は悪玉と決めこんで、お上さまの乱れを糾そうともせず、唯々諾々とそれに従い、果てには選択肢を誤り、選挙区に利をもたらす者を有能な政治家とうそぶく始末である。こんな事なら鈴木宗男も有能な政治家ということになる。げんに宗男さんは地元では現在にして尚絶大な人気をもっているという。

主権在民と云うからには、こんな社会を創出した責めは主権者たる私達にある。

ここにパスカルの言葉がある〝其の方向を誤れるとき、其の努力は無に等しい〟

気の遠くなる様な借金、食糧が余るといって優良農地をつぶしてまで食糧を輸入し国土は荒れ果てた政治家、高級官僚、企業トップの目に余る腐敗、私達が努力したと自負する結果がこれである。これではなんのため

の努力であったのか分からない。今一度パスカルの言葉を吟味してみよう。

仲間同志仲良くすると云う事は悪い事ではない、むしろいい事だ。だが問題は其の質と手段による。ともあれ松寿会は其の軸足を切り換えた、自身の怠惰と無知を詫び贖罪の意味をこめてたかが老人としか評価されない力量をされど老人と自負しつつ社会奉仕にボランティア活動をつづけてゆく組織にしようと思っている。

邪魔にならなければそれが一番だ、どこかで遊んで居て呉れといわれる様な老人の集団にはならないつもりだ。

明るく、豊かな地域社会の創造に若い世代と一緒になって苦楽を共にする組織にしようと思っている。会員諸兄姉の協力と理解、そして地域の皆様の御支援を期待する次第です。

戦下の清華園を想う

枡田まさ子

度々来日されている中国の胡錦涛国家主席の母校が北京清華大学であることをテレビで知り清華と云う文字に思わず「アッ」と驚きの声を夢中であげていたのです。戦下を清華園で過ごした私は、今改めて当時を想いおこすと共に、断片的ながら綴ってみようとペンをとりました。戦後五十九年いや六十年になります。高齢と共に薄れゆく記憶を辿りつつ戦下を生きた思い出の数々は私にとって何よりも大切な宝物と云っても過言ではありません。

では此の清華大学を少々御紹介したいと思います。

北京郊外に位置する広大な土地。森と云いましょうか其処は環境の整った風光明媚な静かな所で誰人も憩いの場として集った過去の優雅さは自ら偲ばれる所です。その中に一際目立つ白亜の城を思わせる本館には大理石を敷きつめた豪華な玄関等それは正に昔を物語っている如く中国の歴史の重みを感じました。

そしてそれは「戦前」「戦後」北京大学と共に肩を並べる名門校として広く世界に名を響かせています。

ところが太平洋戦争によりその建物は我が旧日本軍の占領地として軍病院に没収され北京甲一八二八部隊北支第一、第二、陸軍病院として設立されました。よってその経緯の歴史は今も名を残して居ります。

私は終戦も間近に迫った年の暮れに日赤従軍看護婦として召集の命を受けたのでした。看護婦教育の課程を終えた直後でした。そして今度は日本赤十字救護看護婦として再び厳しい教練のもとにあわただしく祖国を離れたのは一月四日忘れもしない寒い日でした。数え切れない程の私達の先輩が派遣されていましたが終戦も間近に迫った激戦の最中に於いては負傷兵もその数を知らず私達救護班が増員されたのでした。

婦長以下二十名を一ヶ班として編成された救護看護婦は北は山形班から南は熊本班と計七ヶ班でした。七ヶ班は下関にて集結し関釜連絡船にて朝鮮の釜山に上陸しその後は軍用列車にて天津経由で一路北京の清華園入りをしたのでした。門柱にはいかめしい北支派遣軍用一八二八部隊北京第二陸軍病院の文字を目のあたりにしたのも束の間、配属された病棟は骨傷第五病棟で内地ではおそらく目にした事のない光景にしばし目を見張るどころか身の竦む思いでした。当時は最も新しい治療法だった

のでしょう数知れぬベッド上にいや牽引台に足をのせずらりと並んだ壮観さ又上肢骨折による治療法でまるで飛行機の格好をした外転副木シーネギブスと云って骨傷病棟ならではの風景でした。貫通銃創又盲貫銃創による弾丸の摘出手術等昼夜に亘る疲労の蓄積に苦しむ日々でした。内地勤務とは全ての事は異なりそれはそれは大変な毎日でした。医療器具はともかく消耗品の不足に追われ、特に医薬品としては一番必要な麻酔薬の不足でした。摘出手術中に麻酔が切れ、これも内地ではあり得ない事だけに終生忘れる事は出来ません。激痛に堪えかね大きな呻き声をあげる傷兵の声それは正に地獄でした。両手に持った鉗子で傷口を開けている私の手も遂にゆるみそうになり「何やってるんだしっかり開けてろ。」と軍医殿に大声で怒鳴られた事も幾度となく今はただなつかしい思い出として耳に残っています。

又、大部屋勤務と云ってベッド数五十にびっちりの患者に対し我々は数人の不寝番はさながらこれこそ本当の地獄の境地でした。傷口の激痛に堪えかねての悲痛な呻き声は想像を絶するすさまじいものでした。

幾度となく倒れそうになる自分達をたがいに励まし合いながら頑張った友情も今はなつかしさで一杯です。

そんな中、私達の心を癒してくれた清華の森の美しい静かな風景は何よりの慰みでした。宿舎より手術場に通う道中はとても遠く今だったら車での往復だろうとふと現実にかえった気持の瞬間です。

兎に角病院から一歩外に出れば其処は戦時中とは思えない程静かな森にアカシアの並木ネムの木の花盛り足もとを流れる小川のせせらぎの音等は私達にとって憩いの場の一時と安らぎを覚える一瞬でもありました。

それでも夜になると八路軍の遠くに聞こえる銃撃の音は日増しに近く強くなり襲撃に逢う事も少なくなく避難した事も度々でした。

そんな中、二十年八月十五日の玉音放送の終わった一瞬から想像も出来ない第二の戦場が私達を待ち受けていたのでした。日を追って状況は悪化しすべては接収封印され患者はもとより軍医衛生兵は命令のままに清華園を去り空虚な心細さと不安が身辺を包んで行く或る日、救護班は三ヶ班を残して他は内地還送と云う情報が飛び込んで来たのです。一同は飛び上がって喜んだのも束の間婦長の一本のくじで勾留班と決まってしまったのです。もうどうする事も出来ないまま我々は空虚な建物の中に取り残されてしまったのです。

それから間もなく数日後と記憶していますが私達が配属されていた病棟には三十余名程の中国兵が送り込まれて来たのです。毛布を頭からすっぽりとかぶり真っ黒な顔に目ばかりギラギラと走らせ言葉いや声も無くこれぞ正に幽鬼に等しく恐れるままに私達は任務に着いたのでした。幸いにして軽傷患者だったのが救いの種でしばしほっとしたものの神経はこれ迄にない大変疲れました。それでも一ヶ月もすると患者達は人懐っこい眼となり素朴で無邪気なほほ笑ましい行動を見せる様になり院内の掃除を手伝ったり私達に協力の意を見せてくれる様になりました。又時には森に出てバレーボール等も一緒にやり楽しかった事も思い出の一つでした。

当時の中国兵と云えば上官は別としてやる事なす事はすべて最低で白いシーツのベッドに靴のままで寝るとか汚れた帽子をかぶったままなので不慣れな中国語で注意する事もしばしばでした。

当時の中国人の生活は最低の低を極め私達の病院に働きに来て居た「戦時中のこと。」中国の

女達はみじめな者でした。特に此処に入っている患者達は生活水準の低いその上義務教育も受けてない様な一般常識の欠けている者が殆どで中でも衣類の盗みにかけては巧みな者達が多く途方に暮れる事もしばしばでした。

北京市内迄出るとショートル市場と云って盗賊品を販売する店がずらりと並び何でも買う事が出来るのです。だから患者達は院内をそっと抜けて出てはそんな事を繰り返していたので私達の注意には糠(ヌカ)に釘でショートルカンホ、ブシン、と云っては自分達も盗みを働きその品をショートル市場にて売買しそんな繰り返しの日々も見て来ました。内地では考えられない事ばかりの日々でした。

そうこうしているうちにはや三ヶ月が過ぎた或る日三ヶ班の婦長達が副院長である郊中佐に申し入れをしたのでした。私達の復員の相談だったのです。

郊中佐はとても温厚な軍医でした。かつて中佐の若い頃は京大の医学部に留学され当時は滋賀県の大津に下宿されていたとかで私達の滋賀班はなつかしい。そして御自分の第二の故郷は大津だと話され私達の内地還送を快く受理されました。又還送にあたり賑やかな送別会を開いて下さりました。その席上で郊中佐は「東風吹かば匂いおこせよ梅の花」と菅原公の詩を記憶しています。又温かい中佐のお心尽くしの持て成しを受けた事等嬉しかった思い出は脳裏に焼きついて居ます。

そうこうしているうちに四月に入り内地還送の準備も着々と進められいよいよ清華園を去る日を迎えました。入院当時とは変わり親しみの湧いた患者達は去り行く私達の後ろから何処迄も着いて来て別れを惜しんでいた様子がとても印象に残っています。

別れに際し郊中佐は今日迄の労を称えられると共に此の様な言葉を頂きました。

日本は戦争に負けたが決して敗れたのではない。徳心あつき日本民族は今後十年を経ずしてきっと素晴らしい祖国を築き上げ此のアジアの良き指導者として、又此の中国とも暖かい手を結び合う日がきっと来る。私はその日を待っていると涙して賤の所為を述べられました。

そして振りかえる清華園は黙しても又語らずとも数々の思い出は深く深く私の心の奥底に息づいて居ます。

郊中佐が準備して下さった特別の有蓋車に乗り込み天津経由にて無事佐世保に上陸する事が出来ました。二度と祖国の土を踏む事は出来ないと固い決意のもとに旅立ったのでしたが……

短い戦下の思い出でしたが今でも生死を共にした年一回の戦友会は何よりの楽しみです。

戦後六十年を迎えようとしている今日、何よりも世界中が平和であります事を祈りつつ……

清華想いて

清華の森に気象台
アカシア薫る音楽堂
白亜の殿堂木の葉もれ
花咲く野辺で故郷の
便りひらきて親想う
いまだ忘れぬ柿の味
花の北京は紫禁城
天安門に天壇と
万寿山の水清く
石舟に遊ひし友は今は亡く
当時の労苦しのびつつ
想い出つきぬ清華園

旅は気儘(きまま)に パート14

丹後由良ターミナルセンター

今、カニシーズンの真っ只中、週末は特急列車もいっぱいです。想像以上に満足感がある様です。最近はインターネットで直接調べて来て下さる方も多くて、電話での案内は少なくなりました。

長旅で見えた方もワクワク気分で降りてみえます。ただお帰りは、現実も待っているからか少々残念そうなお顔に見えてきます。美味しいものを食べて、のんびりとした田舎を感じ、気分新たに現実と向きあっていただきたいと思います。ただ、高速が宮津の方に延びて、この丹後由良に少しずつ変化が出てる様な気がしています。こんなに綺麗な海岸線もそうないのに残念!!に思います。

自然と特産品、そして歴史街道でもあるこの丹後由良のアピールが出来て、道の駅の様なのがあったらいいのにとは私の希望です。

平成三年七月に由良ターミナルセンターが完成して、さまざまなお客様をお迎えしました。海と山がこんなに近くにあって、海水浴には水の透明度は指折りの中にあり、山は丹後富士とよばれる由良岳があって、京阪神方面から、四月～十月位の間本当にたくさんの方々が見えます。案内、清掃等々、公民館の方々、地域の方々によって分かりやすくしてあり、登山者の方々から嬉しい言葉もいただきます。宮津線の中の小さな駅の灯りが消える事のない様に、一人でもたくさんのお客様が来ていただける事を心から思います。

川柳

空間にぽつんと落ちているモラル
雑音に蓋さらさらと流れよう
抱きしめる沖から帰って来た人よ

大森　美智子

叱られて見た夕焼けの温かさ
老ひとり海に向かってゼロになる
一期一会私に過ぎた亡夫(ッマ)だった

坂本　妙子

四方先生のご退職にあたって

岸田六右衛門

由良地区で医師としてご活躍頂いた四方先生が医師としての業務を昨年十二月を以てお取り止めになられました。

地区民として残念に思いますと共に、永年地区に於ける先生の業績に心から感謝申し上げる一人です。

先生は昭和三十年由良で開業されてより四十七年の長い間、地区民の健康に心を配って頂き病気の追放と健康増進にご努力頂くと共に、文化面でも色々の面で先頭に立って地区発展、向上にご努力頂いたことを思いますと時、只々感謝の気持で心からお礼を申し上げる次第です。

医師をお止めになっても先生のお人柄から由良地区住民の健康管理は勿論、いろいろの面でご助言を頂けることと存じますが、本職をお止めになって医師の不在という事を考えた時に、野瀬先生、井土先生、四方先生と由良地区に医師の常駐から以後不在という状態に残り少ない人生ではありますが先ゆき不安を感じるのは私一人ではないと存じます。

舞鶴や宮津には病院もあり、個人の医院もありますが何といっても地元に医師が居られることが一番安心できるものと考えます。

先生の後をどの様にして地区民の健康を護って行くのか、常駐が望めない時は他のどの様な方法があるのか？　それぞれの衝に当たられる方はお考え頂き、ご議論されている事と存じますが、よりよい方法で地区民の健康が保たれ安心して暮らせる方法の実現にご努力頂きます事を一区民として心から願っております。

自分の道（下）

濱野路　大森　孝

憧れた舞鶴の町（それ迄見ることのなかった、由良村限定の私の生活の日々）と、さらに伸び続けたい私の夢を叶えてくれる筈の舞鶴中学校への合格は嬉しさも一入（ひとしお）であった。あっちを向いても嬉（うれ）しい。こっちを向いても誇らしい。そんな念願叶った得意の中学生の日常も幻滅するのにさして暇はかからなかった。

戦時下の時勢のため、中学に入る迄、私の心に長年培ってきた都会としての舞鶴（西）地域が、その実は閑散としていて、否むしろ殺風景な輝きのない町にしか過ぎなかった。そして、古本屋の唯の一軒もない、不毛の町並みの続く田舎であって、くすんだ家並みが西舞鶴駅から、連なるばかり。これじゃ、由良村とあまり変らんなと臍（ほぞ）をかんだ。

せめてもの校内の図書室は金網越しにみるべき本がなく、あっても国策の思想書とかで（開架式でないのがもどかしく）、町の唯一の図書館が『田辺』の城跡の参考館の内部にあることはあったが、学校の図書室と似たりよったりで、うすっぺらい舞鶴の郷土史が、日中戦争開始前後の昭和10年代に出版されたものがたった一冊（金網はなかったが）、申し訳のように置かれているだけで、貧弱で迚もお話にならない。

先ず健康、健康こそは人間生活の総ての源です。

こんな調子で、凡そ文明、文化とは程遠い学習環境の中で、空しく思春期、それも中期の時間が逝ってしまった。身辺を流れ去る、貴重な時間をあたら見送るばかり。何か大切なものをとらえようのない口惜しい中学生の生き方が広がって行った。

そんな時、たった一度進路を考える上での啓蒙のチャンスがやってきた。それは全く偶然の出来事だった。

いつものように無聊をもてあますように、帰りの宮津線の列車の時刻に合わせて、時間待ちの町の中のぶらぶらをやっていた。『竹屋町』へ出て、途中橋を渡って『寺内』の方へ歩いていた。しばらくすると、『堀上』の広場の角に、玄関があけ放された仕舞屋が一軒あった。この家は丁度、広場の東の角にあって、広場に向かって玄関が屡々開いていた。

その家には私にとっては渇仰の太平洋戦争開戦前の（昭和15年以前の）物理・化学・代数・幾何・三角法などの私たちにとっては古い中学の教科書や、それに参考書類も交じっている書棚が玄関の右手におかれていた。私たちは新制度の下で、レベルダウンした「物象」とか「新数学」の教科書で、明らかに学力の上では劣る。

そこに60才を超えたような老婦人の姿がみかけられた。訪れて、書棚にある旧制制度化下の理数系の中等学校の教科書を、今日一冊、次に二冊と、遂次わけていただき、判らぬ部分はその侭として、兎に角学習の足しにしたのだった。さて、問題は遂次買った中の携帯版の、とある実用書にあった。この提要とよぶべき、簡便な実務書が、その僅か一頁に載っていた図式が、14才だった私の職業選びのきっかけともなったし、又就職に至る迄の規範として念頭に刻まれてしまった。情報量に於いて圧倒的に優る今日では何でもない『公務員』枠に過ぎないのだが。

当時は事程さように、一つの思考のまとめが、容易にすすまなかった。14才辺りから、15才を経ても、『軍人と教師』という向いた職業が連ならずに、大きな『謎』として、敗戦後の16才迄もちつづけた次第である。

この私の進路選びを側面から援けてくれた職業と適正について記述された実用書の提要は、実に面識すらなかった舞鶴市に住む一好学の先輩の秘蔵書に俟つところが大きいものであった。

提要の記述は、チャート程ではなく、上下に連携している程度であったが、左のような表現で、

性格　適した職業

一、神経質　？忘却

二、多血質　？忘却

三、粘液質　軍人；教師（但し上の二つのみ）

四、胆汁質　？忘却

自分では、粘液質の性格が、几帳面とか律儀であるとかが述べられていたこともあり、自分は軍人志望であったので、少々無理してでも自らを励まして、軍人に向かわせて部分もあった。もっと適切なこの方面の分類があったかもしれないが、一中学生が知り得た最新のものだった。

このあと究極の海軍兵学校へ入校する。兵学校での生活は昭和20年3月28日より開始されるが、学習指導は愈入校教育が終わって、翌日の4月11日より急ピッチですすめられた。（何しろ沖縄戦線では死闘が続く。吾が国の興亡がかかっている激戦の最中での教科学習なのである）。

そんな貴重な時間の中で、教える側も、教えられる側も必死で、知識や技術を習得して行った。英語はラフカディオ・ハーンの怪談を学び、地理はシベリヤ鉄道やバム鉄道に、コンビナート（アンガラ・バイカル等）の数々を知って満足していた。

そんな息づまるような日常の中で、教科の国語（文語体……

公用文）と作文の学習で、江頭大尉（文官）と出逢う。先輩の、どことなく品のある人柄で、指導の巧みさと何処かしら抑制されたような挙措は妙に後々印象づけられた。恐らく指導要領をおさえて、一切の不要な説明は省いて、懸命に伝えようとしていられるのだろう。5月17日（木曜）の作文教科書が支給された頃には、この頃、敬愛の念を抱いていた同教官は国語指導のカリキュラムを終了していた。

他方、5月13日（日曜）からは米空軍艦載機が、兵学校のある佐世保軍港へ波状的に来襲してきた。（6月23日―佐世保市街夜間空爆によって全滅した。火焔天に昇って、一晩中爆裂音響きわたって凄惨な地獄絵図）

そんな中にあって、例えば、

イ、～なさざるべからず
ロ、礼儀に徹すべし
ハ、熱心なるべし
ニ、如何ともし難きなり
ホ、気概もて行はざるべからず
ヘ、遅れをとるべからず
ト、なす能わざると雖も～
チ、行はざるべからず
リ、～せんとす
ヌ、反省するを要す
ル、～を支給せらる
ヲ、証拠なりというべし
ワ、自重せざるべからず
カ、宜なり　等々

恐らくは、こんなに精一杯取り組んだ学習活動の経験を私は後にも先にも知らない。

そんな訳で、江頭教官に海兵で師事できたことは大きな感動を呼んだし、後年自ら教職についてから、折にふれ、時に及んで教授技術はかくあるべしと思い浮かべた。一つの教師のモデルとして江頭教官を評価していた。

敗戦後は、虚脱状態で、何事にも興味と関心が湧かず、中学も翌年三月、四年で卒業した。究極の目標であり、生き方であった海軍軍人が崩れてしまった後、生涯を綰くするのに何を選ぶかだった。落ち着かない日々が続いた。

海軍生活、半年の間に、思春期に大きく人間が変わったように思う。どうすれば生き残れるか。どうすれば一番良い生き方が出来るのか。社会を見まわし乍ら、人づてに由良の浜べに出て、製塩の仕事に出る。どちらをみても、21年は、敗戦のあと食料が不足し、村の人々は米と塩との生産に大童だった。

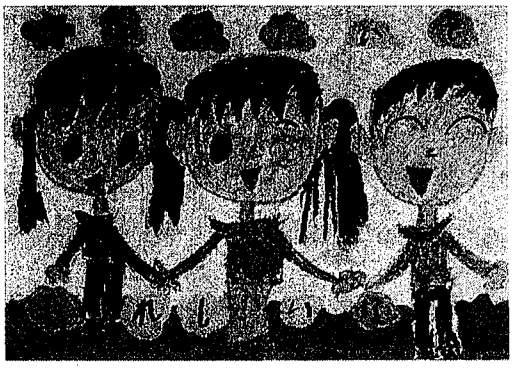
そんな中で、少し人生を考えながら、社会の事情、それも成人の社会への興味が湧いて、大森清四郎家の製塩に雇われることになった。これは海水を早朝両つの桶に汲んで、浜べに撒布して、撒き終わると帰宅できた。

戦争の末期、（昭和20年7月）に父が和歌山県海草郡の海岸防備のため、応召して、私よりかなり遅れて復員を果たしたのだが、翌年には胃潰瘍で自宅で〝長期欠勤〟をとって珍しく臥せるに及んで、家の中は俄かに慌ただしくなった。今思えば、父の病は、軍隊での緊張やストレスが一因であったのだろうか。兎も角、遮二無二、生きるのが、敗戦後の『由良』では、人それぞれの四六時中の最大の課題であった。

そんな中で、昭和22年春の広島高等師範学校進学は、10月に入って、三高との対テニス戦のあと、激励をかねて拙宅へきてくれた東京の期友、市村健夫君との邂逅も支援となった。

（平成17年1月13日了）

宮津市人権啓発ポスター作品展入選



●ポスターの部　優秀賞

由良小一年　玉垣小百合さん

シベリアの思い出（3）

田中貞彦

昭和二十年八月十五日、日本国が連合国のポツダム宣言を受諾し戦争は終結した。このポツダム宣言第九条の「日本国軍隊は完全に武装を解除されたる後、各自家庭に復帰し、平和的且つ生産的生活を営むの機会を得しねらるべし」を無視して関東軍将兵をシベリアに連行した。その際一千名単位の作業班を編成しその員数の不足を補う為に一般民間人を連行し、尚不足を補う為に満蒙開拓青少年義勇軍の少年、又旧制中学四年生（現在高校一年生）彼等はまだ十五、六才の少年達をもシベリアに連行その数六十万人以上。それ等の日本人をソ連の復興の為に、山林伐採や炭坑、石切り、その他国営農場（ソホウズ）での酷使、その結果伐採、炭坑等の重労働での災害死や栄養失調に依る病死等に六万人を超える死亡者が出る。これ等の惨状を当時は日本政府も未だ把握していなかったそうだ。

一月四日ブラゴエ駅から列車に乗り込む。ハバロウスク経由でシベリア本線に入りウラジオストックから祖国日本へ。何度もだまされていながら矢張り思いは故郷へ。列車は数時間走って止まる。皆降りろ。の指示で下車をする。ライチヘンスクという片田舎。誰だダモイと言ったのは、又だまされた。ライチハで少し休憩しているとソ連の通訳が三時間程歩いてウャツカへ行くという。もうこの時は今迄持っていた多くの荷物も少なくなり歩くのには楽になったが地面は凍り強風と雪。周りは何もない大平原の真っ只中をひたすら前の友の姿を見ながら歩く。

二時間も歩いただろうか、大分風も雪も治まってきた頃小高い丘に辿り着き休止。前方に民家が見え温泉町の様に湯煙が立ち昇っている。「あれシベリアにも温泉があるんかいな」と冗談を云っていたがまだまだ心身共にそんな余裕はない。それよりウャツカとはどんな所なのかその方が心配だ。再び歩き初めた道の両側には雪を被った広い野原が見える、これが農場の畑なのか、自分達を先導したロシア人通訳「アレクサンドロフ」はチョビヒゲも背格好もかの「ヒットラー」によく似た男、後で知った事だがスパイとして日本に潜入、特に神戸、横浜には詳しいと聞いた。この通訳から「君達はウャツカで主として国営農場（ソホウズ）で働いてもらう」と初めて労働について聞かされた。農場らしき野原の中を歩き続け先程見えていた民家の湯煙は実は「ペイチカ」の煙だった事が分かる。夕方五時頃収容所に着いた。もう大分暗くなってきた。この地で何時迄抑留され捕虜生活が続くのか。すでに収容所の周りは鉄条網が張りめぐらされ四隅に望楼が置かれソ連兵が監視している。収容所の中で各隊毎に別れる。小隊長の田中さんより「今日から炊事勤務をするように」と言われ、連隊本部指揮班に入る。収容所の中にはすでにテント幕舎が数個と木造建物が建っている。テントの中にはドラム缶で作ったストーブが置かれ、二段ベッドになっている。木造建物の方にはペーチカがあり、二重扉になっているので寒さは幕舎と大違い。唯この建物は牛舎後なので異様な臭いが残っている。少し離れた所に炊事場があり早速夕食の為炊事場へ集合する。五〇〇立ガマ四基、一〇〇立ガマ一基全て石炭で炊く様になっている。炊事班長に原田さん、上野さんが来ら

れ、自分達の外に員数合わせに連れてこられた中学生義勇軍の十五、六才の若者、又軍属でもう五十才に近い人々と共に炊事に従事する。ソ連より支給される糧秣は黒パン、蒸麦、高粱、粟、ヒエ、塩干物、砂糖、塩、油等毎日収容人員に合わせて受領する。当時の常識では黒パンは均等に後の糧秣は単純にカマの中にぶち込み雑炊を作る。支給される量が少ない為水を多く入れ量を増やす。それではスープのような雑炊しか出来ない。粟を多くもらった場合は水を多く入れて炊き長く蒸すとわりに硬いご飯のようになり一時の満腹感がある。

蒸麦は少し甘味があっておいしいが余り量が増えない。出来るだけ粟を主食にとバグダーノ軍曹（ソ連兵の糧秣係）の目をかすめ粟を持ち帰る。将校には白パン、その他の糧秣も多く配給があり将校食として別に作らねばならなかったが鈴木部隊長命で、「この様な状況下では将校も兵隊も同じ物を食べるように」と伝達された。皆その言葉を聞き鈴木部隊長の偉大さを改めて知らされた。炊事には若干体を悪くされた人、病弱な人を毎日使役としてジャガイモや人参の皮ムキなどに手伝ってもらう。

病弱な人には少しでも暖かい所で作業をしてもらい早く元気になってダモイしてもらいたい。

この間にも牛小屋宿舎の中では構内作業の人々によって毎日床磨きが行われ一日一日牛小屋が本当の宿舎に変わっていく。厳寒の時には零下三十度の厳しさも四月五月の雪解けになると広大な農場で朝早くから夜おそくまで日本人の乗ったトラクターが農耕を始める。急にウャッカ村も活気づきソ連人も今までのシューバー（毛皮のオーバー）やカートンキー（フェルト製の長靴）を脱ぎ女性はミニスカートにネッカチーフ、冬場見ていた同一人とは思えぬ一変してすごくうつくしく見える。日本人もこの頃から温床でキャベツ、キュウリ、トマト等の苗作りを初め五月頃にはこれらを苗植えをする。又同じ時期にあの広大（一本の畝二〇〇〇米以上畝の数八〇〇本以上）な畑にジャガイモの種マキが始まる。又放牧班は馬や牛をひきつれ山野に放牧に行く。山野にはこの時期だけ草花が一斉に咲き乱れる。咲いている期間が短いので咲く花も色とりどりで非常に美しい。

日本人も元気を取り戻し笑顔が戻る。冬の間は朝十一時前にならないと太陽が見えなかったが、春が進むにつれて一日一日早く太陽の顔が見えるようになってくる。温室で育ったキャベツ、キュウリ、トマトの苗も植えられていく。これから除草、水まき等の作業が待っている。戦友達も大変だが他部隊の様に伐採や炭坑作業でなく少しはましか。

このウャッカ収容所には自分達の鈴木部隊を初め北支から日ソ戦に備えて満州入りした佐久間隊その外に学徒、少年義勇軍、軍属等千人単位で収容されている。その為春頃には昔の軍隊組織はなくなり、殆ど上下の差もなく皆友人といった感じだ。だからお互いに捕虜といった暗さもなく、暖かくなるにつれて夜は故郷の自慢話に花を咲かせる。

時には声に自信のある人や以前漫談家、落語家出身の人達で演芸会を開くこともあった。中でも東北出身で佐々木さんの「鈴懸の経」は忘れられない思い出の歌だ。炊事班でも一度演芸会を行い鈴木部隊長に喜んでもらった思い出もなつかしい。鈴木部隊長も帰国後昭和二十五年に亡くなられたと聞く。夏もいつの間にか過ぎ、秋風が吹く頃になるといよいよジャガイモ等の収穫が始まる。皆大いに張り切っている。夕食時になぜか残飯が多くなる。飯がまずいのか、もともとそんなにおいしくはないが、皆に聞くと畑で休憩時にジャガイモを炊いたりトマトを食っ

たりで腹が減っていないらしい。だからどの顔も明るい。この様な状態が続いてくれたら皆体も元気になってダモイ出来るのだが。やがて収穫も終わりボツボツと冬の支度にかかる頃どこからかダモイの声が出る。今度は本当か今迄の時と一寸違う本当ならばよいのだが。医務室に笛吹軍医ともう一人柄沢少佐という軍医がいた。入ソ当時はいなかったが何時どこの部隊で来た人とも知らなかったが大いに変わった人だ。昼の暇な時に一人で収容所の外へ行き（実はパン工場、浴場、ソ連軍司令部があるので殆どの人が営兵のソ連兵に「ドラースチー」（今日は）と声をかけるとだまって通してくれた）蛙を取ってきては「田中君フライパン貸してくれ」と言う。フライパンに油を少し入れて貸すと自分で皮をはいでフライパンで焼いて食べ豪快に笑う。ある時足に一寸怪我をして治療に行くと「何だこれ位の怪我は」と笑いながら手荒い治療をしてくれた。その後しばらくして彼は一人ハバロウスクへ移送された。あの悪名高い又戦後迄殆どの日本人が知らなかった石井部隊、細菌（ペスト、コレラ、チブス等）を製造しロシア人、中国人等に人体実験をしていたと戦後問題になった関東軍七三一部隊第四部製造課長、つまり細菌製造の責任者だったのが彼柄沢少佐その人だった。彼は後にハバロウスク軍事裁判で三十年の刑を受けその後病死された。

昭和二十一年十一月ついにダモイ名簿が発表された。鈴木部隊を主力に高齢者、病弱者を優先して編成された。この編成も日本人のスタッフが作成した。炊事からも何人かダモイ組に入り自分も入っていたのだが炊事の中で学徒T君一人がもれていた。編成作成中に誤って彼だけがもれてしまったらしい。十六才位の少年皆と一緒に帰りたいのは当然、班長から「いずれ近い内に又第二次のダモイがあるだろうから代わってくれないか」と相談され班長の困っているのを見かねて交替したが次のダモイ迄二年かかるとは思わなかった。翌年春をすぎた頃、炊事班長の原田さん、上野さんがやめられ角田君が来た。彼は神戸出身で私と同年配だったので仲良く仕事も出来た。捕虜生活も一年半近くになると大分環境にもなれてきた。この頃になると民主運動という名の委員会ができ、元軍曹が委員長になったという話も聞いていたが炊事の吾々には何の関係もなく聞き流していた。ある時日本新聞という見た事もない新聞が回覧されてきた。

この頃より民主運動の声が聞かれるようになった。角田君より今迄の雑炊から見た目も楽しく食べられるような日本人向きの物を作ろうと提案があった。「よし、やろう」とその日から何をどうして作るか。ソ連から支給される物は従来と変わらない。でも一つ一つ考えれば穀物（粟、稗、蒸麦）粉、砂糖、塩、油、肉、魚などこれらを使って天ぷら、握り鮨等々に食事の大改革だ。民主運動よりもこの方がどれだけ皆の為になることか、その後通訳の渡辺さんからソ連側に食堂を作るよう申し入れる。

まさか許可が出ると思っていなかったが案外簡単に許可が出る。炊事場に隣接している宿舎（牛舎）を食堂に改造する為大工班、建築班、塗装班による突貫工事が始まる。約半月の間にあの牛小屋が綺麗に天井、壁、土間に至るまで作り変えられ、食堂、椅子が並べられ一度に三百人も坐れる一流レストランになった。

壁には塗料もないのに土を焼き、石灰を混ぜ草花を入れいわゆる色を作る塗装班。画家の寺田さん国延さんがレーニン、スターリンの肖像画を描いたり、草花の絵を描かれ皆を楽しませてくれた。後は皆が喜ぶ料理を作るだけだ。

経ヶ岬から潮岬まで（No.4）

四方俊一

一九八七年五月一日㈮、出発してから四日目の朝、緊張しているのか朝が早い、小鳥の囀りで目が覚める。午前五時半朝食を済ませて出発する。左方に京都府立須知高等学校の正門、右手に京都府立丹波自然運動公園、飲食店と連なり、役場、学校、銀行と高原の町を形成していた。

九号線と二七号線が一つになり交通の「要」となる所、昭和三〇年に須知町と高原村が合併して成立した町である。早朝で町は静か、時偶、エンジン音高く走るのは長距離トラックと早朝出勤の車だけである。国道九号線は道路工事のため、町内の旧道を歩く、観音峠に向けて足は軽い、古くからの丹波・丹後と京阪神を結ぶ交通の要所であり、明治の末期迄宿場町として栄えた。明治九年、米国人オースチン・ウイードを主任に実習教員十一名で構成され、近代的畜産酪農が教授されたのが現京都府立須知高校である。明治四五年に京都競馬場の移転で、須知競馬場が設置され、淀競馬場開設の大正十三年迄存続した。又、大正十一年には須知飛行場（曽根）も開設した。明治十九年、高原村に紅茶伝習所が創設されたのを始めとして、産業は昭和二五年頃迄農業が中心で米麦、薪炭、茶、繭等を産したが近年になって畜産・酪農に力を入れている。又、自動車による交通機関の発達で近郊都市への野菜・果物の供給地として着目されるとともに、国道沿線の広い土地は産業界から注目されて、宅地開発・工場誘致が進み町の開発・発展が注目されている。

国道九号線は明石・水戸・新水戸を経由して「観音峠」に至る。ここを境として東は太平洋気候、西は裏日本気候に分かれると学んだもので一つの節目である。新水戸から九号線に出て峠を抜ける、園部町と丹波町の境にある峠、園部町側の旧道に観音堂があり山陰街道の要害の地であった。源頼光が鬼退治の途次に休息したと云われる峠茶屋がある。

明治初年現在の国道九号線の峠道が通じ昭和八年に近代的な舗装道路となった。九号線は大きくヘアピンカーブしているので旧道の峠道を下る。旧道は荒れ放題であったが田圃道を歩き、畜舎の前を通り「園部宮町」に出る。時間は午前八時三〇分、国道と府道が交差している、右折すると府立公園ルリ渓を越して大阪府能勢に至る、左折すると府道は美山町に至る、真っ直ぐに九号線を歩き、園部町の市街地入口に達する。

経ヶ岬から「一四五キロ」歩いた事になる。「園部町」船井郡の南西部を町域とし、東は八木町、南は亀岡市、西は兵庫県篠山市と一部大阪府能勢町、北は日吉町、丹波町に接する。園部町は北東部から南西部にかけて約十六キロ、北西部から南東部にかけて約六キロの細長い町である。園部川の橋を渡ると右手には園部警察署と役場があり左手は旧街道筋で町並みの中に入る。国道四七七号線沿いに「園部城」が有る、江戸時代の園部村の西端、小向山（小麦山）を中心に築かれた園部藩主小出氏の城跡。元和五年（一六一九）出石から園部に転封された小出吉親（外様大名で明治迄続く）は、山麓西側に半田川、北側に園部川が流れる小向山とその南東部台地一帯を城地とした。城は同七年に完成し小向山頂には三層の小向山櫓が構築された。

明治元年（一八六七）、明治天皇臨時の行在所として大規模な修

理事業が行われた。現在城門は園部高等学校の施設として使用され、城域は校地とされている。

慶応年間から明治維新の変革の中で諸藩とも廃城へと動いたが、園部城は大改築を加えられた。

慶応三年藩主小出伊勢守英尚は入京して、孝明天皇の皇后九条夙子の准后殿を守護し、京中見回り役をしており、同年十二月下旬、西郷隆盛らにより、幕府軍と砲火を交えることになった場合、明治天皇を山陰道から安芸・備後方面に遷し、同時に諸国に檄を飛ばして勤王の軍を募ると云う計画が立てられていた。

こうした中で、園部城は明治天皇の臨時行在所と目されたのである。明治三二年八月、京都鉄道(現ＪＲ)が京都～園部間に開通し町は発展の契機を掴んだ。

園部の町は対岸は京都縦貫自動車道の工事真っ最中であった。八木町に入った吉富駅（ＪＲ）から九号線はＪＲと並行して八木駅まで続く。京都府の穀倉地帯と云われている様に大変な耕作地帯で有る、「室河原」－「鳥羽」－「玉ノ井」－「大藪」－「八木」－「観音寺」－「屋賀」と歩く。国道沿いにはドライブイン・製材所・自動車整備工場があり、大美谷に自動車学校や船井郡衛生管理組合等が有る。

京都縦貫自動車道工事現場と九号線・ＪＲとが交差し、その上交通量も多くなって来たので旧道の道をとる。そして南丹病院を左手に見て八木の町に入り、ＪＲ八木駅に着いた。午前十時、三〇分休憩す。

昭和六二年（一九八七）五月一日午前十時三〇分天気良好、八木駅を出発した。交通の激しい九号線をこのまま歩くべきか？京都迄時間が掛かっても脇道をとるべきか？ここは思案所である。九号線をこのまま歩くと京都の五条壬生通り迄二一キロ(五時間)。それとも八木駅から府道二五号線を歩き明智越えを歩き嵯峨野に出る道二七キロ（七時間）をとるべきか思案したが府道二五号線を歩いた。八木駅から京北町に向け繁華街を通り大堰川の橋を渡り交差点を右にとった、府道亀岡園部線で交通量も大変に少ない、歩くには大変に環境が良い、道路は少々狭いが一路亀岡保津に向かう。八木町と亀岡市の境界の所に「屋賀」が有る、この「屋賀」は千代川（亀岡市）に所在した国府の移転したものと推定され、国府垣内、国府川、国府駅場、宗神社など国府に関連すると思われる地名が見られる。古代、律令制下の行政区画では丹波国桑田郡に所属していた、和銅六年（七一三）に丹波国から丹後国を分立して以来、桑田郡は丹波国の政治の中心地となった。丹波国府の所在地については、「和妙抄」では桑田郡内とされているが、いまだに遺構は発見されず、現在の八木町屋賀、亀岡市三宅町、保津町亜是地の地が国府址と想定されているが確定されるには至ってない。又、丹波国分寺は千歳町国分の台地にあった、境内には創建時のものと見られる礎石が一部残存している。亀岡盆地は山陰道が貫通し、古代には丹波国府を中心にして大江駅と野口駅とを結ぶ交通の要所であった。大江駅の所在は定かでないが、篠町老ノ坂付近であったろうとも云われている。中世の丹波国は平宗盛・平盛俊等平氏政権の政治・経済的基盤の一つであった。戦国期には、守護が幕府官僚の細川氏であった関係から丹波勢はしばしば畿内各地の戦闘に動員され、永正年間（一五〇四～一五二一）には保津諸侍と呼ばれた、当地域内の土豪や地侍達も従軍転戦した。

しかし有力な国人と召された波多野・柳本兄弟らは、大永七年（一五二七）四月、管領兼丹波守護の細川高国に反抗し、反高国派の細川晴元と連合して、幕府・高国の軍勢を桂川の合戦で破り、京都を占領した以後、

丹波国内では、八上城（篠山市）に本拠を置く波多野氏の力が強大になり、天正年間（一五七三～一五九二）の明智光秀の進入まで波多野一族による支配が続いた。天正年間に明智光秀が亀山城を築き、併せて城下町を建設した。織田信長政権による丹波支配の一大拠点となったものである。しかし、山崎合戦で光秀が敗死した後は、天正十一年（一五八三）から同十八年（一五九〇）迄は羽柴秀勝、次いで文禄四年（一五九五）迄は小早川秀秋の支配下に置かれた。その後、前田玄以・前田茂勝が五万石を領して入府したが、関ヶ原の戦（一六〇〇）の結果除封、慶長一四年（一六〇九）に、岡部長盛が下総国の山崎から転封され元和七年（一六二七）に福知山へ転封され、その後三河国の西尾から松平成重が入封松平忠昭の代わりに寛永十一年（一六三四）に天封となり明治維新迄次々と変わっていった。明治二六年、京都鉄道会社が設立され、飛躍的発展への道が開かれた。保津川筏問屋もこの影響で次第に衰え、観光面に重点を置き「保津川下り」に至っている。道路は国道九号線が整備され、京都縦貫自動車道が走り京阪神のベッドタウンとして発展してきた。

足は保津の街に入る、愛宕谷の南の山道、俗に云う「明知越え」である。明智光秀は、天正十年五月二七日愛宕山に登り連歌の席で「ときは今天が下知る五月かな」と詠んだ、私は今同じ道を登る。足は山を下り化野念仏寺を通り嵯峨野に出る。「あだしの露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つるならひならば、いかに、物のあわれもなからん。世はさだめなきこそ、いみじけれ」と「徒然草」にある。昔、この辺一帯は死骸を捨てて風葬にした墳墓地である。「嵯峨野」、東は太秦、西は小倉山、南は大堰川を境とする平坦な地であった。住吉は大堰川の溢水による沼沢地で、未墾地が大半を占めていたが秦一族が川を改修し田畑の開拓が進み肥沃な地となった。平安遷都後は天皇、貴族はここで遊猟し若葉を摘んで遊楽をし多くの歌を残している。近世に入ると人家も増え今は全国からの観光客が行き交い、観光バスがひっきりなしに通り、土産物店が軒を並べ大変な格差がある。足は、嵐山美術館前から桂川に出る。右を見れば観光客が大勢渡っている「渡月橋」、大堰川に架かる橋で「嵐橋」、「法輪寺橋」、「大橋」、「御幸橋」とも云われていたが、のち亀山上皇が、しまなき月の渡るに似るとして渡月橋と命名したと云う。道を左に取る、府道三九号線が桂川沿いに堤防となっていて、そこを歩く、右は松尾橋、その先、河原は運動公園で数人の人が運動をしている。上野橋から高辻葛野西通を東進し国道一六二号線に出る。右は西京極、左は太秦、京北町に至る、この辺は天神川高辻である。

戦前は農村的景観を持つ地域で、近郊疏菜の栽培がその生業の中心であった。太秦に一九二〇年代に進出する映画の撮影所は郊外の広い土地を求めた、この近郊的景観が変化していくのは戦後の昭和三十年代以後である。

また昭和三七年には西京極に市営スポーツセンターが設けられ、すでに開設されていた西京極球場と併せて京都市スポーツ施設のメッカとなっている。九号線（五条通り）に出て光華女子大学、同短大の前を通り京都市立病院に達する。夕刻、娘の家で疲れた体を休めた。午後七時。

畳の上でホット一息入れる。入浴後の一盃の酒は疲れた体に染みとおり癒すには最高であった。京の夜は寝息とともに静かに更け行く。（次号に続く）

訂正とお詫び

「公民館だより」一二二号船野大君「ニュージーランドに行って」文中次の誤りがありました。

訂正してお詫びいたします。

P10上段初行目　エトルア及び二段目終わりから8行目ロトアルはそれぞれ**ロトルア**に訂正

編集後記

岸田六右衛門氏から「四方先生のご退職に当たって」と原稿をいただきました。

以前から問題提起され、由良自治連合会を中心に宮津市に要望してきましたが、岸田氏のお考えのとおり四方先生の業績に感謝を申し上げながら今後の地域医療について不安を感じています。

戦後60年、当時の厳しい状況について寄稿がありました。

生死を越えての想い出に心打たれます。

戦争を知らない子供たちがいるなかで今なお内戦の続く国が多く、常に弱い立場の子供や女性が犠牲になっています。

命の大切さを共有し、平和で思いやる心豊かな社会を皆んなの力を築いていきたいと思います。

（飯澤）

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。